

# 成人看護学実習の準備段階である多職種カンファレンスの シミュレーション演習の学習効果

## Learning Effect of Simulation Exercises for Interprofessional Conferences at a Preparatory Stage in Adult Nursing Practices

柴 裕子<sup>1)</sup>・林 久美子<sup>1)</sup>・青木 郁子<sup>2)</sup>・足立 久子<sup>1)</sup>

Yuko SHIBA, Kumiko HAYASHI, Ikuko AOKI, and Hisako ADACHI

抄録：多職種カンファレンスのシミュレーション演習の学習効果を明らかにすることを目的とした。看護系大学2年生77名に看護師、理学療法士等の職種の役割をあて事例を用いて多職種カンファレンス演習を行った。2022年9～12月にチーム医療における看護師の役割や患者・家族にかかわる多職種連携について学習効果を調査した。回答率24/77(31.1%)、有効回答率22/77(28.5%)であった。他の職種と意見交換をするための情報の理解や看護師の職種の専門性を考える機会となったが社会資源・サービスの理解について学習効果が低かった。今後は患者の疾患の経過に合わせた社会資源・サービスの理解を深められる教育内容を検討する必要がある。

キーワード：多職種連携、多職種連携教育(IPE)、多職種カンファレンス、シミュレーション

### I. はじめに

2020年1月16日に国内で初の新型コロナウイルス(coronavirus disease 2019:以下、COVID-19)の感染者が確認され、医療現場や医療関係職種等の学校、養成施設においては、実習中止や休講を余儀なくされた。2020年2月28日の文部科学省の事務連絡によると、文部科学省、厚生労働省の臨地実習中止への対応として、実習施設の確保ができない場合、実習施設の変更、実習時期の延期、演習または学内実習の実施など柔軟な対応が認められた<sup>9)</sup>。しかし、教育内容の縮減を認めるものではないため、「国家試験の受験資格」を充たすために最大限の教育内容の検討が必須であった。COVID-19の分類は5類へ引き下げとなり、臨地実習の状況は改善しつつある。今後も新興感染症の発生の可能性はあり、臨地実習が行えない場合の代替の学習方法の検討には大きな意義がある。

A大学の成人看護学実習では、臨地実習が許可されない場合に備え2020年4月より大学で利用可能となった動画教材の看護事例を利用し、学内実習やオンデマンド型(Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment:以下、Moodle<sup>®</sup>)を利用した実習を準備した。2020年は5月から6月まで臨地実習が許可されない状況となり、オンデマンド型(Moodle<sup>®</sup>)に一部双方向のコミュニケーションを取り入れた実習を実施した。2020年9月以降の

成人看護学実習Ⅱ(急性期)は、臨地実習が許可された場合は臨地実習とし、許可されない場合は学内実習やオンデマンド型実習を組み合わせた。2021年度は臨地実習が許可されない場合は、オンライン型(Zoom<sup>®</sup>による双方向のコミュニケーションツール)を組み合わせた実習を実施した。オンデマンド型とオンライン型の違いは、オンデマンド型はインターネットを通じて学生は各自が必要なときに学習を開始し好きな時に中止できる<sup>6)</sup>。それに対してオンライン型は、教員は学生たちと同時的に対話が可能で、学生同士の話し合いができる方式である<sup>6)</sup>。これらの対応から、臨地実習が許可されない場合であっても、学内実習やオンライン実習で実習目標を達成できるように実習内容を検討し、実習目標の達成を目指した。しかし、臨地実習でしか体験できない看護職以外の専門職種の役割や多職種連携の学びは、机上での知識の習得と担当教員の経験を伝える内容にとどまり、臨地の現実味を学ぶには限界があった。

多職種連携教育(Interprofessional education:以下、IPE)は、英国専門職連携教育センター(U.K.Center for the advancement of interprofessional education:CAIPE)によると、「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために、共に学び、互いから学び、互いについて学び合う過程」と定義されている<sup>3)</sup>。英国では、医療福祉専門職を養成するほとんどの高等教育機関において、関連職種連携教育が実施されるようになった<sup>5)</sup>。

1) 看護リハビリテーション学部看護学科

2) 金城学院大学看護学部看護学科

一方、2005年に日本の保健・医療・福祉専門職を養成している全国の大学513箇所における IPE の認知や普及の程度を調査した報告では、回答者の所属学科での連携教育（IPE）の取組は、有効回答数126件中41学科がすでにカリキュラムに反映済みで、11学科が今後反映する予定と回答していた<sup>11)</sup>。近年では、看護実習中の看護学生の受けもち患者を、他大学の薬学生も担当しそれぞれが患者ケアにかかわる実習を行い、IPE カンファレンスを実施した報告<sup>14)</sup>、同じ大学内の異なる学科（医学科、薬学科、保健学科）の臨床実習中の学生が多職種チームで治療・看護・服薬指導の立案を行った報告<sup>8)</sup>、同じ大学内の異なる学科で合同演習を実施した報告<sup>2) 7) 10)</sup>など多くの IPE の取り組みが報告されている。IPE の効果は、患者中心のチーム医療を実践できた実感や、自分の職種以外の職種に対する障壁が消失する等が示されていた。これらの先行研究から、学部・学科を越えた他の学部の学生との IPE の成果が明らかにされている。他学部の学生との IPE を実施できていれば、臨地実習でのその効果はより高くなると考えられる。しかし、COVID-19感染拡大による危機的状況（以下、コロナ禍）により、急に臨地実習が許可されなくなる状況は今後も予測される。コロナ禍で行動が制限され、学部・学科を越えた教育が難しい状況であっても IPE を実施できる方法を見出すことが必要である。

A 大学は看護学科、理学療法学科の医療系学部を有しているが、IPE の科目がなく、IPE の取り組みがされていない状況である。そこで、成人看護学実習の準備段階として、看護学科のみで実際の臨床の場や看護師を含む職種を再現するために、シミュレーション教育を試みた。シミュレーション教育とは、「臨床の事象を、学習要素に焦点化して再現した状況のなかで、学習者が人やものにかかわりながら医療行為やケアを経験し、その経験を学習者が振り返り、検証することによって、専門的な知識・技術・態度の統合を目指す教育（学習）」と定義されている<sup>11)</sup>。シミュレーションは、テクニカルスキルとノンテクニカルスキルの習得ができ、ノンテクニカルスキルには、状況認識、意思決定、コミュニケーション、チームワーク、リーダーシップ、ストレスと疲労の制御といったものが含まれる<sup>12)</sup>。広義のシミュレーションには、ロールプレイ、ペーパーペイシエントを用いた学習が含まれ、ロールプレイは役割を演ずることを通して体感したことを糧とし学びを深める<sup>12)</sup>。本研究では、役割を演ずることにとどまらず、状況認識、意思決定、コミュニケーション、チームワーク、リーダーシップ、ストレスと疲労の制御といったノンテクニカル部分が含まれるため、「シミュレーション」という用語を用いる。

そこで、看護学科のみで多職種カンファレンスのシミュレーション演習（以下、多職種カンファレンス演習）を実施し、その学習効果を明らかにする。多職種カンファレンス演習は、コロナ禍にかかわらず、看護職以外

の専門職を学ぶ学生との IPE が困難な状況があっても、多職種カンファレンス演習による実体験ができる。本研究により、学生が多職種の専門性や多職種連携における看護師の役割について考える機会となると期待される。

## Ⅱ. 研究目的

看護学科の学生による多職種カンファレンス演習を実施し、その学習効果を明らかにする。

## Ⅲ. 用語の定義

### 1. シミュレーション

本研究における「シミュレーション」とは、臨床場面のうち、多職種カンファレンスの場面を再現した状況の中で、学生がそれぞれの職種の役割を担い患者の問題を話し合う体験とする。

### 2. 多職種カンファレンス演習

多職種カンファレンスの場面をシミュレーションの方法を用いて、授業の演習のなかで実施することを、「多職種カンファレンス演習」とする。

## Ⅳ. 研究の枠組み（図1）

多職種カンファレンス演習の学習効果を「効果的な話し合いをするための方法」、「対象者を中心とするチームの構築」、「多職種の専門性と尊重」、「多職種チームの中での看護の役割」の4つの領域で構成した。4つの領域以外で学生がどのような学びを得たかは、量的に確認できない部分であるため、「専門職種と意見交換するための重要な情報」を記述的に求めた。本研究の目的は、これらの学習効果を明らかにする。さらに、臨地実習で学生がチーム医療における看護師の役割や、患者・家族にかかわる他の職種との連携を理解するための課題を検討する。研究の枠組みを図1に示した。

## Ⅴ. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、独自に作成した学習効果を測定する4つの領域からなる質問項目と専門職種との意見交換に関する自由記述的質問からなる無記名自己記述式質問法である。

### 2. 研究対象者

対象は、看護学科2年生77名のうち、研究の同意が得られた学生である。対象となる学生は、2年生の看護リハビリテーション技術の科目で90分×4回、理学療法学科の教員による授業を受講している。おもな内容は呼吸・循環のリハビリテーション、日常生活動作、活動範囲の拡大に向けた援助、関節可動域の測定、筋力向上の援助である。また、多職種カンファレンス演習の第1回

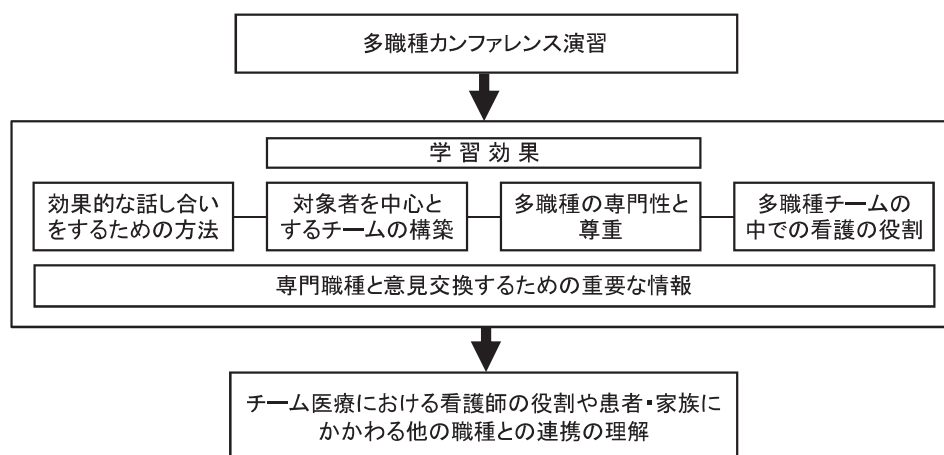


図1 研究の枠組み

の講義で、連携職種である医師、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、義歯装具士（PO）、視能訓練士（ORT）、臨床心理士（CP）、介護福祉士、医療ソーシャルワーカー（MSW）について説明を受けた。

### 3. 調査期間

2022年9月～12月

### 4. データ収集方法

a. 「看護リハビリテーション技術」の科目の2コマ（90分×2回）で、学生に看護師、理学療法士等の職種の役割をあて、多職種カンファレンス演習を実施した。

第1回は、講義を通して連携職種について学び、事例の読み合わせを行った。学生は、2年生前期の段階では、臨地実習で多職種カンファレンスを見学したことがないため、多職種カンファレンスの実際が分からない。多職種カンファレンスをイメージできるように、看護師、理学療法士、医師等のカンファレンスの意見（台詞）を具体的に示したシナリオ（35歳男性、脊髄損傷の事例）の読み合わせを実施した。1グループ5～6名とし、役割は患者、看護師、医師、理学療法士とした。多職種カンファレンスをどのようにすすめたらよいかかわるように、進行の役割、カンファレンスで何を解決するのか、カンファレンスの所要時間を具体的に示した。

第2回では、脳梗塞と変形性膝関節症のうち、いずれかの事例を用いて多職種カンファレンス演習を実施するため、グループで事例と役割を決定した。脳梗塞の事例は、成人期にある後遺症を残した患者の回復期の退院支援カンファレンスの場面である。一方、変形性膝関節症の事例は、成人期にある患者で術後の痛みにより車椅子の移動困難を問題とするカンファレンスの場面である。いずれの事例も成人看護学実習で学生が担当することがあり、回復期、急性期の設定であるため、本事例を多職種カンファレンス演習の事例として選択した。第2回までの課題は、「患者のために、専門的な立場で、この意見を他の職種に伝えたい」「患者のために、他の職種に聞いてみたい」等、担当した職種の立場で意見を述べら

れるように提示した。第2回は、20分間で多職種カンファレンスを実施し、グループで学びの共有を行い終了した。

b. 調査は Moodle®で行った。しかし、調査期間中に Moodle®による調査ができない期間があり回答数が少なかった。そのため、データ収集方法を質問紙調査に変更し、質問紙で収集したデータを追加した。

### 5. 調査内容

a. 多職種カンファレンス演習の事例

脳梗塞、変形性膝関節症の2つの事例のうち、どちらの事例を選択して演習を実施したかを問う。

b. 多職種カンファレンス演習で担当した役割

グループメンバーで、患者・家族、看護師、医師、理学療法士（Physical Therapist：以下、PT）または作業療法士（Occupational Therapist：以下、OT）、介護支援専門員（care manager：以下、CM）、ソーシャルワーカー（Social Worker：以下、SW）、福祉住環境コーディネーター、薬剤師、栄養士、記録者（看護師とする）のうち、どの役割を担当したかを問う。

c. 多職種カンファレンス演習の学習効果

調査項目は、チーム医療における看護師の役割や患者・家族にかかわる多職種との連携を考えるという実習目標をもとに、独自に作成した。内容は、「効果的な話し合いをするための方法」6項目、「対象者を中心とするチームの構築」5項目、「多職種の専門性と尊重」3項目、「多職種チームの中での看護の役割」3項目である。合計17項目5段階（1：全くあてはまらない、2：あまりあてはまらない、3：どちらともいえない、4：多少あてはまる、5：あてはまる）とし、1と2を回答した者を「学習効果が低い」とし、4と5を回答した者を「学習効果が高い」とした。

d. 看護師が他の専門職種と意見交換するために重要な情報の提示

「看護師が他の専門職種と意見交換するためにはどのような情報の提示が重要だと実感したか」という質問に



対し、記述的に回答を求めた。記述とした理由は、どのような情報の提示が重要であると実感したか、学生が自ら考え出して回答できるためである。これは、受け身の理解だけではなく、具体的に何を理解したかという学習効果を示している。

## 6. 分析方法

a. 量的データは、学習効果の低い2点以下（1点の「あてはまらない」と2点の「あまりあてはまらない」と、学習効果の高い4点以上（4点の「多少あてはまる」と5点の「あてはまる」）の度数と割合を算出した。

b. 記述的データは、事例ごとに「看護師が他の専門職種と意見交換するために重要な情報の提示」の記述と、そのデータ数を抽出し、類似した内容にカテゴリー名を記した。

## VI. 倫理的配慮

中部学院大学研究倫理審査委員会で審査を受け、承認の得られた後に調査を開始した（承認番号 C22-0001）。研究対象者に研究目的・意義、研究方法、研究期間、研究参加の自由、個人情報保護の方法、研究中・終了後の対応について説明した文書および口頭による説明を行った。調査は、Moodle®により実施するため、同意撤回できる期限を設け、同意撤回の申し出があった場合は、研究対象者から除外した。しかし、調査期間中 Moodle®による回答ができない期間があり回答数が少なかった。そのため、研究倫理審査会で追加審査を受け、承認を得て質問紙調査を追加した（承認番号 C22-0001-2）。質問紙調査では、研究の同意は調査の回答をもって研究に同意とした。質問紙は無記名のため、同意撤回できないことを説明した。調査は、成績評価に影響しないことを説明し、本科目の追・再試験の結果開示後に行った。質問紙の回収ボックスは、鍵を用いないと取り出すことができないものを使用した。紙媒体のデータは、研究責任者の研究室で施錠して保管し、電子媒体のデータはパスワードをつけて保管した。学会発表や論文発表をする際には、研究対象者が特定できないように十分に配慮した。

## VII. 結果

### 1. 研究対象者の概要

研究対象者77名のうち、24名の回答があり（回答率31.1%）、一部未記入であった2名を除き、有効回答を22とした（有効回答率28.5%）。選択した事例は、脳梗塞が15、変形性膝関節症が7であった。担当した役割は、脳梗塞の事例では、看護師4名、医師3名、PTまたはOT 5名、CM 2名、その他1名であり、変形性膝関節症の事例では、看護師5名、医師1名、PTまたはOT 1名であった。

### 2. 多職種カンファレンス演習の学習効果（表1）

表1に、脳梗塞の事例と変形性膝関節症の事例を分けて、多職種カンファレンス演習の学習効果の結果を示した。学習効果の低い2点以下の割合が25%以上、および学習効果の高い4点以上の割合が70%未満である項目に着目し、学習効果が低かった項目とした。一方、学習効果の高い4点以上の割合が70%以上である項目を、学習効果が高かった項目とし、結果の概要を述べる。以下より、多職種カンファレンス演習の学習効果について、a. 2つの事例に共通した多職種カンファレンスの学習効果、b. 脳梗塞の事例の多職種カンファレンス演習の学習効果、c. 変形性膝関節症の事例の多職種カンファレンス演習の学習効果の順に説明する。以下、4つの学習効果は「」、各学習効果の項目を“ ”で示す。

a. 2つの事例に共通した多職種カンファレンス演習の学習効果

多職種カンファレンス演習の4つの学習効果のうち「効果的な話し合いをするための方法」の6項目はすべて、学習効果が高かった者が70%以上であった。「対象者を中心とするチームの構築」の5つの項目のうち、“患者の意向に沿った方向性で、話し合いができた”、“患者のかかえる苦痛について、話し合いができた”、“住宅環境について、話題となった”は、学習効果が高かった者が70%以上であった。「多職種の専門性・尊重」の3つの項目、と「多職種チームの中での看護の役割」の3つの項目は、学習効果が高かった者が70%以上であった。

b. 脳梗塞の事例の多職種カンファレンス演習の学習効果

脳梗塞の事例で学習効果が低かった者が25%以上、且つ学習効果が高かった者が70%未満であった項目は、「対象者を中心とするチームの構築」の“社会資源・サービスについて話題となった”であった。学習効果が高かった者が70%未満であった項目は、「対象者を中心とするチームの構築」の“患者の家族について、話題となった”であった。

学習効果が高かった者が15人中100%であった項目は、「多職種の専門性・尊重」の“看護師以外の専門職種の専門性について考える機会となった”、「多職種チームの中での看護の役割」の“他の職種と意見交換するためには、看護師としてどのような情報を提示すべきか理解できた”、“看護師という職種の専門性について考える機会となった”であった。

c. 変形性膝関節症の事例の多職種カンファレンス演習の学習効果

変形性膝関節症の事例で学習効果が低かった者が25%以上、且つ学習効果が高かった者が70%未満であった項目は、「対象者を中心とするチームの構築」の“患者の家族について、話題となった”であった。

学習効果が高かった者が7人中100%であった項目は、「対象者を中心とするチームの構築」の“患者の意向に

表 1 多職種カンファレンス演習の学習効果

項目		脳梗塞 (n=15)				変形性膝関節症 (n=7)			
		学習効果 (低)		学習効果 (高)		学習効果 (低)		学習効果 (高)	
		1点と2点 の人数	1点と2点 の人数の 割合 (%)	4点と5点 の人数	4点と5点 の人数の 割合 (%)	1点と2点 の人数	1点と2点 の人数の 割合 (%)	4点と5点 の人数	4点と5点 の人数の 割合 (%)
効果的な 話し合い をするた めの方法	①多職種カンファレンスでは、患者のどのような問題を解決するのが明確に示されていた。	1	6.7	14	93.3	0	0.0	6	85.7
	②役割になりきれように事前準備をしたうえで、多職種カンファレンスに臨んだ。	1	6.7	12	80.0	1	14.3	5	71.4
	③多職種カンファレンスでは、自分の役割になりきり、発言や行動することができた。	1	6.7	12	80.0	0	0.0	5	71.4
	④発言や行動ができない状況であっても、多職種カンファレンス中は担当した役割になりきることができていた。	3	20.0	11	73.3	0	0.0	5	71.4
	⑤多職種カンファレンスの結果から、参加した専門職種が今後行うべき行動が明確となった。	1	6.7	11	73.3	0	0.0	6	85.7
	⑥多職種カンファレンスは、ほぼ予定時間を使って終了することができた。	0	0.0	13	86.7	0	0.0	6	85.7
対象者を 中心とす るチーム の構築	⑦患者の意向にそった方向性で、話し合いができていた。	1	6.7	12	80.0	0	0.0	7	100.0
	⑧患者のかかえる苦痛について、話し合いができた。	1	6.7	12	80.0	0	0.0	6	85.7
	⑨患者の家族について、話題となった。	1	6.7	7	46.7	2	28.6	4	57.1
	⑩住宅環境について、話題となった。	1	6.7	11	73.3	1	14.3	5	71.4
	⑪社会資源・サービスについて、話題となった。	4	26.7	9	60.0	1	14.3	5	71.4
多職種の 専門性・ 尊重	⑫多職種カンファレンスの課題となっていた部分については、他の専門職種の立場を理解できた。	0	0.0	13	86.7	0	0.0	7	100.0
	⑬看護師以外の専門職種の専門性について、考える機会となった。	0	0.0	15	100.0	0	0.0	5	71.4
	⑭多職種カンファレンスでは患者の日常生活を向上させるために、PT や OT から意見を確認できていた。	0	0.0	13	86.7	0	0.0	7	100.0
多 職 種 チームの 中での看 護の役割	⑮他の職種と意見交換するためには、看護師としてどのような情報を提示すべきか理解できた。	0	0.0	15	100.0	0	0.0	6	85.7
	⑯看護師という職種の専門性について、考える機会となった。	0	0.0	15	100.0	0	0.0	6	85.7
	⑰多職種カンファレンスでは、看護師は患者の訴えや希望について、意見をのべていた。	1	6.7	11	73.3	0	0.0	6	85.7

そった方向性で、話し合いができていた”、「多職種の専門性・尊重」の“多職種カンファレンスの課題となっていた部分については、他の専門職種の立場を理解できた”、“多職種カンファレンスでは患者の日常生活を向上させるために PT や OT から意見を確認できていた”であった。

### 3. 看護師が他の専門職種と意見交換するために重要な情報の提示 (表 2)

「看護師が他の専門職種と意見交換するためにはどのような情報の提示が重要だと実感したか」の問いに対して、記述的データを求めた。総データ数は36であり、脳梗塞の事例のデータ数は25 (69.4%)、変形性膝関節症の事例のデータ数は11 (30.6%)であった。これ以降、カテゴリーは、【 】で示す。脳梗塞の事例は5つのカテゴリー、変形性膝関節症の事例は3つのカテゴリーが抽出された。脳梗塞の事例で最も記述数の多かったカテゴリーは、【入院中の状態】であり、次いで【他の職種に対する情報の提示方法】、【家族背景】、【入院前後の生活】、【生命にかかわる問題】の順に少なくなった。変形

性膝関節症の事例も脳梗塞の事例と同様に、記述数は【入院中の状態】が最も多く、次いで【他の職種に対する情報の提示方法】と【退院後の生活】の記述数が同じで少なかった。

## VII. 考察

本研究は、成人看護学実習の準備段階として、看護学科の学生による多職種カンファレンス演習を実施した。学習効果として、「効果的な話し合いをするための方法」、「対象者を中心とするチームの構築」、「多職種の専門性と尊重」、「多職種チームの中での看護の役割」の4つの領域と学生が重要であると感じた看護師が他の専門職種と意見交換するために必要な情報を分析した。これらの結果から、臨地実習で学生がチーム医療における看護師の役割や、患者・家族にかかわる他の職種との連携を理解するための課題を検討した。

以下より、第1に脳梗塞と変形性膝関節症の2つの事例に共通した学習効果を検討し、第2に2つの事例で異なる学習効果の検討、第3に学生が重要であると感じた

表2 看護師が他の専門職種と意見交換するために重要な情報の提示

n=36

事例 データ数 (%)	カテゴリー	データ数 (%)	記述的データ (データ数)
脳梗塞 25 (69.4%)	入院中の状態	13 (36.1%)	普段の状態 (5)、ケア中の情報 (1) コミュニケーションの情報 (1)、検査結果 (1)、生活状況 (1) 患者周囲の環境や問題 (1) 患者の訴え (2)、希望 (1)
	他の職種に対する情報の提示方法	5 (13.9%)	他の職種の役割を把握した上での情報の提示 (1) 専門性を意識した意見の提示 (2) 他の職種が共有できるようにわかりやすく簡潔に伝える (1) 正確に伝える (1)
	家族背景	4 (11.1%)	家族の状態 (1)、心情 (1) 家庭の状況 (1)、家の構造 (1)
	入院前後の生活	2 (5.5%)	入院前の生活 (1)、退院後の生活 (1)
	生命にかかわる問題	1 (2.8%)	命にかかわること (1)
	入院中の状態	9 (25.0%)	普段の状態 (4)、言動 (2)、生活の様子で気になったところ (1) 患者の意志に寄り添った提案 (1)、思い (1)
変形性膝関節症 11 (30.6%)	他の職種に対する情報の提示方法	1 (2.8%)	他の職種がかかわる情報の提示 (1)
	退院後の生活	1 (2.8%)	退院後について話した内容 (1)

看護師が他の専門職種と意見交換するために必要な情報の検討、第4に臨地実習で学生が多職種連携を理解するための課題を考察する。

### 1. 脳梗塞と変形性膝関節症の2つの事例に共通した学習効果の検討

脳梗塞、変形性膝関節症の事例のどちらを選択した学生においても、「効果的な話し合いをするための方法」の学習効果が高かった。学生は、多職種で効果的な話し合いをするために、担当した職種を演じて発言や行動ができていたと考えられる。カンファレンスの進め方では、対象者の課題を解決するための話し合いを行い、それぞれの学生が担当した職種が、終了後に行うべき行動を明確にできたと評価していた。また、カンファレンスの所要時間の厳守ができた。これは、予行演習的に他の事例の多職種カンファレンスのシナリオの読み合わせにより、所要時間や進行方法を理解したうえで実施に臨んだためであると考えられる。

「多職種の専門性・尊重」についても2つの事例に共通して学習効果が高かった。毛利らは、学部共通科目の「チーム連携セミナー」で看護学科と理学療法学科の学生10名程度で構成されたグループで事例演習した結果、対象理解や障害を理解したことを他の職種（他の学部の学生）にわかりやすく説明するという目標の達成感が低かったことを報告した<sup>10)</sup>。毛利らの報告の対象学生は、3年生前期で看護過程は終了し、領域実習前の学生である。本研究の学生は、2年生で疾患の学習は終了しているが看護過程の学習前の段階である。多職種カンファレンス演習の目標は「対象理解や障害を理解したことを他の職種（他の学部の学生）にわかりやすく説明する」という高い目標とはしていない。本研究の学生の学習段階をふまえると、この結果は、相応の評価であると考えられる。

また、「多職種チームの看護の役割」についても2つの事例に共通して学習効果が高かった。荒木は、看護学科と社会福祉学科の2年生に、多職種連携によるロールプレイとディスカッションを行った<sup>13)</sup>。学生は看護師として患者・家族の思いを理解しておくことや情報共有のためのコミュニケーション能力・知識が必要であることを学び、看護の専門性を学んだと報告した<sup>13)</sup>。この事例では看護師以外の社会福祉学科の学生との協働で患者の退院後の生活を具体的にイメージできていた。本研究では看護師以外の職種を演じている看護学生が、その職種の立場で意見を述べ、幅広い視点から患者の状態や思い、希望を想像できていたと考える。これは、他の職種の専門性を学ぶと同時に看護師の専門性も考えていたと推察された。

### 2. 脳梗塞と変形性膝関節症の2つの事例で異なる学習効果の検討

脳梗塞の事例では、「対象者を中心とするチームの構築」のうち、社会資源・サービスの話題の学習効果が低かった。社会資源・サービスを理解するためには、患者が患っている疾患の病態生理、病期、患者の背景や日常生活を理解したうえで、社会資源やサービスの基礎知識を組み合わせる必要がある。研究対象者は2年生前期の時期であり成人看護学実習や老年看護学実習などの領域実習に行っていない。そのため、患者が利用できる社会資源やサービスを考えるには、まだ困難な段階である。これを考慮し、脳梗塞の事例は、退院支援計画として介護保険や住宅改修、訪問リハビリテーション等の情報を含めた。しかし、これらの専門用語を使って、他の職種を担当した学生が理解できるような説明は、職種を学び始めたばかりの学生には難しいと推察された。

一方、変形性膝関節症の事例では、「対象者を中心と



するチームの構築」のうち、患者の家族の話題について、学習効果が低かった。この理由は、事例に家族の情報が含まれてはいるが、患者の問題が退院後に家族に支援を求めなければならない状況を示す事例ではなかったことが要因と考えられた。

### 3. 学生が重要であると感じた看護師が他の専門職種と意見交換するために必要な情報の検討

脳梗塞の事例の演習は、成人期にある後遺症を残した患者の退院支援のカンファレンスであった。一方、変形性膝関節症の事例も成人期にある患者で、術後の痛みにより車椅子の移動困難を問題とするカンファレンスであった。2つの事例に共通して最も記述数が多かったカテゴリーは、【入院中の状態】であった。学生は、看護師が他の専門職種に伝えるべき情報について、病棟看護師の立場で患者の入院中の状態に着目していた。学生は、看護師が患者の入院中の状態や家族背景をよくわかっている職種であるため、それらの情報を正確に他の職種に伝えることが重要であると実感していた。さらに、脳梗塞の事例では、記述数は少ないが、【生命にかかわる問題】が抽出され、予想とは異なる結果であった。脳梗塞の事例は急性期を脱した回復期であり、“自分でトイレに行こうと動いてしまう”という転倒の危険に関する情報はあがるが、バイタルサインや再梗塞の危険を予測させる情報はなかった。学生は脳梗塞という疾患が回復期であっても再梗塞や転倒・転落のリスクがあることを看護師の立場で他の職種に伝えられた可能性がある。

脳梗塞の事例には、入院中の状態、家族背景、住宅環境、退院後の訪問リハビリテーションの情報が含まれていた。この中で、学生は患者の【入院中の状態】、【家族背景】に関する記述ができていた。しかし、訪問リハビリテーションに関する具体的な記述はなかった。また、【他の職種に対する情報の提示方法】は記述数が多かったが、どの職種にどのような情報を提示することが重要であると実感したかは示されていなかった。一方、変形性膝関節症の事例では、車椅子移動困難について、理学療法士等の職種とカンファレンスでこの問題を解決することを想定していた。この事例においても【入院中の状態】の記述数は多いが、他の職種に看護するうえで具体的に困っている内容を伝えられたかどうかは、これらの記述からは読み取れなかった。2つの事例に共通していることは、看護師として他の職種にどのような方法で情報を提示するかという点については考える効果があった。しかし、看護師として専門職種に協力を得るためにどのような具体的な内容を伝えるかという点は、この結果から導くことができなかった。

### 4. 成人看護学実習の準備段階として多職種連携を理解するための課題

A大学の成人看護学実習の多職種連携に関する実習目標は、「チーム医療における看護師の役割について自分の考えを述べるができる」と、「患者(家族を含む)

にかかわる看護職および各専門職との連携を考えることができる」である。本研究の多職種カンファレンス演習では、成人看護学実習の準備段階として成人看護学実習の実習目標をふまえ、「効果的な話し合いをするための方法」、「対象者を中心とするチームの構築」、「多職種の専門性と尊重」、「多職種チームの中での看護の役割」の学習効果を得られるように、複数の専門職種が連携する状況のある事例で演習を実施した。患者を中心に看護師、および看護師以外の職種を演じてカンファレンスを実施した体験は、成人看護学実習で多職種連携を学ぶ準備段階として、学習効果があったと推察された。学習効果を広く抽出できた記述的データは、【入院中の状態】と【他の職種に対する情報の提示方法】であった。しかし、成人看護学実習で学生が多職種連携を理解するための課題として、「患者の家族・住宅環境・社会資源・サービス」について話し合えるように、患者の家族や病状に合わせた住宅環境、社会資源の理解を深められる教育内容を検討する必要がある。また、看護師と看護師以外の職種との連携は、患者の入院中の状態を他の職種に正確に伝えるだけではなく、看護師として他の職種に協力を得るために伝える内容を検討することも多職種連携として重要である。さらに、多職種による連携・協働は、1回では身につけることは難しく、学習経験や既習知識を学習基盤とし、学習進度に応じた学びを積み重ねていく必要がある<sup>13)</sup>。土肥は、1年生が対象となる基礎看護学実習Ⅰでは、実習目標として「医療施設内の各職種の活動内容を知る」、「チーム医療の必要性について考察することができる」を設定した<sup>4)</sup>。2年生の基礎看護学実習Ⅱにおいては「対象者とその家族および医療チームメンバーと適切な人間関係を形成することができる」を設定し、学習課題が明確になると述べている<sup>4)</sup>。このように、成人看護学実習においては、教員と臨地実習指導者が、多職種が連携し協働する場面を設定し、学生の学習進度に合わせた実習内容の調整が課題である。

## Ⅸ. 研究の限界

本研究には3つの限界がある。第1に、多職種カンファレンス演習前の学生のレディネスを測定していない。第2に、看護学科2年生前期以外の時期の学生を対象とした調査を実施していない。第3に、研究対象者の母集団が少なく量的に分析するには限界があった点が本研究の限界である。

今回は、演習前後のデータを比較していないため、多職種カンファレンス演習の学習効果とするには、ごく一部の結果に過ぎない。多職種連携に関するレディネスの測定は、今回2年生前期の調査を実施したが、2年生後期や、3年生前期の臨地実習前等、時期の異なる調査により、その結果に応じた時期の学生指導にいかせる可能性がある。今後は、本研究結果をもとに、多職種連携に

関する学生のレディネスを測定する方法を検討し、2年生後期や3年生前期の臨地実習前など、今回の調査とは異なる時期の調査を加えた研究計画を検討したいと考える。

## X. 結論

成人看護学実習の準備段階として、看護学科の学生に多職種カンファレンス演習を実施し、学習効果を分析した結果、以下の結論を得た。

1. 看護学生は、担当した職種を演じて患者の課題を解決するための話し合いを行い、学生が担当した職種が、多職種カンファレンス演習終了後に行うべき行動を明確にできたと評価していた。
2. 看護師、および看護師以外の職種の立場で多職種カンファレンス演習に参加し、患者の意向に沿い、患者の苦痛に着目した話し合いができたと判断していた。
3. 多職種カンファレンス演習は、他の専門職種の間を相互理解し、看護師以外の専門職種について考える機会となった。
4. 多職種カンファレンス演習により、看護師として、他の職種と意見交換をするための情報の理解や、看護師という職種の専門性について考える機会となった。
5. 看護師として専門職種に協力を得るためにどのような内容を伝えるかという点について、導くことができなかった。

## 利益相反

本論文に関連して、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆さまに、心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部を日本看護研究学会第49回学術集会で発表した。

## 引用文献

- 1) 阿部幸恵 シミュレーション教育の構造と理論, 阿部幸恵 (編), 「臨床実践力を育てる! 看護のためのシミュレーション教育」, 56-84, 医学書院, 2013
- 2) 坊岡峰子 金子 努 ケアマネジメント教育におけるアクティブラーニングの効果, 多職種連携教育 (IPE) に焦点をあてて, 人間と科学 広島県立保健福祉大学誌, 20(1), 73-82, 2020
- 3) CAIPE Strategy 2022-2027 launched, What is CAIPE, <https://www.caipe.org/about> 2023.9.26 閲覧

- 4) 土肥美子 さまざまな多職種連携教育の実践方法 臨地実習, 寺崎文生 (監修) 「実践多職種連携教育」, 262-264, 中外医学社, 2020
- 5) 藤田郁代 関連職種連携教育の歴史的背景, 北島政樹 (編) 「医療福祉をつなぐ関連職種連携」, 13-17, 南江堂, 2013
- 6) 飯箸泰宏 オンライン授業を始めよう, 福村裕史 飯箸泰宏 後藤顕一 (編) 「すぐにできる! 双方向オンライン授業」, 7-16, 化学同人, 2020
- 7) 飯田尚美 竹崎和子 柘野浩子 COVID-19 パンデミック下での2学科合同による専門職種連携教育 (IPE) の取り組み, リハビリナース, 14(6), 612-617, 2021
- 8) 三好智子 岩室雅也 花山宜久 小川弘子 小比賀美香子 名倉弘哲 大塚文男 医療系学部教育でのIPE (Inter-professional Education: 多職種連携教育) の実践を通じた患者中心の医療の経験, 医学教育, 53(6), 531-536, 2022
- 9) 文部科学省 資格試験・講習について 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校養成所及び養成施設等の対応について (令和2年2月28日) (PDF:575KB) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/mext\\_00119.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00119.html) 2023.1.24 閲覧
- 10) 毛利智果 駒井裕子 中野聡子 徳留静代 「チーム連携セミナー」におけるIPE実践の試み 事例演習の達成度の低い目標の明確化, 日本リハビリテーション看護学会誌, 11(1), 53-61, 2021
- 11) 大嶋伸雄 保健医療福祉系大学におけるインタープロフェッショナル教育 (IPE) の認知度と今後の発展性に関する全国調査, 保健医療福祉連携, 1(1), 27-34, 2009
- 12) 高橋平徳 内藤知佐子 (編), 看護教育実践シリーズ5 体験学習の展開, 91-92, 医学書院, 2019
- 13) 田中亜紀子 伊織信一 森寺智子 鮫島陽子 専門学校における新カリキュラムに向けたIPEの検討: 看護学科と理学療法学科の合同シミュレーション演習を実施して, 看護展望, 46(13), 1276-1282, 2021
- 14) 薄井健介 岡田浩司 紫桃裕造 上岡泰弘 渡辺善照 日野弥栄子 鈴木まゆみ 瀬戸初江 大塚真理子 高橋知子 柴田信之 薬学部学生の病院実習期間中に実症例を通して実施した看護学部学生との専門職種連携教育の効果, 医療薬学, 48(3), 121-128, 2022